

# 幼児の自己制御を育む父子遊びの発達力動理論 —介入プレイ観察による力動理論の構成—

## The Developmental Dynamic Theory of Father-Child Play that Contributes to the Development of Self-Regulation in Early Childhood: A Construction of Dynamic Theory via the Intervener-Observer Method of Activity Play

荻本 快 OGIMOTO, Kai

● 国際基督教大学大学院教育学研究科  
Graduate School of Education, International Christian University



父子関係, 乱闘遊び, 身体遊び, 攻撃性, 自己制御

father-child relationship, rough-and-tumble play (RTP), physical play, aggression, self-regulation

### ABSTRACT

父親と幼児による Rough-and-Tumble Play (RTP: 乱闘遊び) は, 幼児が自らの攻撃性を制御する能力の発達に寄与することが示唆されてきた。本論は, 父子の RTP に関する幼児の発達理論に基づき, 介入プレイ観察法による事例検討をもとに理論的考察を行うことで, 父子の RTP における幼児の自己制御の発達要件について, その変数間関係を考察した。その結果, RTP において優位性を保つ父親が攻撃性を制御する態度と行為を示し, それを幼児が模倣することで, 攻撃性の制御の内在化を促進する父子の協調が生じることが見出された。そして, 幼児の攻撃性の制御が安定化する過程で, RTP 中に幼児が自らの限界を超えようと挑戦することと, それに対する父親からの賞賛と誇りの表現によって幼児の父親への同一視が強化されることが考察された。

It has been suggested that father-child rough-and-tumble play (RTP) contributes to the development of one's ability to regulate her/his own aggression in early childhood (e.g. Paquette, 2004). Based on the previous developmental theories of early childhood related to father-child RTP, this article examines the relationship

between the variables of developmental requisites of self-regulation in early childhood that are specific to father-child RTP. This is achieved through a theoretical discussion based on a single case study of an early childhood boy involved in an intervener-observer method of activity play. In closing, a theoretical hypothesis about the developmental mechanism of self-regulation during early childhood in father-child RTP play is also provided.

## 1. 目的

Rough-and-Tumble Play (RTP; 乱闘遊び<sup>1</sup>)は身体遊びの特定の形であり、レスリング、固め技をかけ合うこと、飛び跳ねること、転がること、追いかっこ等、攻撃的な遊びによって特徴づけられる (Pellegrini & Smith, 1998)。身体遊びは、幼児の情動制御 (Barth & Parke, 1993)、そして情動のコーディングと関連する (Carson & Parke, 1996)。これらは仲間関係におけるコンピテンスにも影響する (Fildes & Walden, 2008)。身体遊びの中でも、RTPが、子どもが自らの攻撃性を制御する能力の発達に寄与し得ることが示唆されてきている (e.g. Paquette, Carbonneau, Dubeau, Bigras & Tremblay, 2003; Lindsey & Mize, 2000)。しかしながら、RTPと身体遊びによって幼児の自己制御が発達するメカニズムについての研究は、理論的、実証的には乏しい (Flanders, Leo, Paquette, Pihl & Seguin, 2009)。そこで本研究では、統制された介入プレイ観察法により、父子のRTPにおける幼児の自己制御発達のメカニズムについて、理論仮説を構成することを目的とする。

## 2. 父子のRTP発達理論

父と子のRTPは、2歳ごろから始まり、RTPの頻度は後期幼児期にピークを迎える。子どもが3-4歳になると、RTPは親子相互作用の総計の約8%にまで下がる (Pellegrini & Smith, 1998)。この時期は、前頭葉の自己制御機能の発達期であり (Seguin & Zelazo, 2005; Zelazo, Carter, Reznick & Frye, 1997)、攻撃的行動制御の発達に深く関与する。また、RTPに従事する幼児は、ドーパミン作動性インセンティブ報酬に媒介されて、幼児は喜

びを体験する。これが生じる脳の領域は、性的行動や、母性行動などの、他者に対する親和行動に関する領域である (Peterson & Flanders, 2002)。

父親は、遊びの中で子どもを身体的、感情的、認知的に刺激し、リスクを取ることや、自らの身体的、認知的、感情的限界に到達することを後押しする (Paquette, 2004)。特に男子に対しては、RTPを通して、自らの攻撃的な行動を調節しコンテンツすることを教える (Paquette, 2004)。父子のRTPが幼児の自己制御に与える影響に関しては、Paquette (2004) と、Flanders et al. (2009)、Peterson & Flanders (2005) による父子の相互作用の質についての論点が、目下の到達点である。

Paquette (2004) によると、良質のRTPの中では、父親は二つのメッセージを幼児に送る。情動の要素を含む「おまえを愛している」と、競争の要素を含む「私はおまえより強い」の二つである。その結果RTPには、大きな楽しさ・喜びと、父親の適度な統制の使用、という二つの要素が含まれる。愛情が深い親による明確なルールと限界は、筋が通っている限りにおいて幼児に安全感をもたらし、自律性の発達を妨げない。父親がRTPの中で統制を行いながらも、愛情を伝えることが、幼児の自己制御の発達に寄与するとされる。Flanders et al. (2009) は、RTPにおける父子の相互作用における父親の優位性と父親による幼児の統制に着目している。父親の優位性について、彼らは「父親は典型的には大きく強いので、セルフハンディキャップのような行動によって、子どもが瞬間的に優位に立つかどうか、そしてどれくらい優位に立つかどうかを決めることができる (Flanders et al., 2009, p.287)」と論じている。父親は権威を示し、子どもの行動の限界設定をすることを通して、幼児が相互作用をするための安全な

環境を提供する (Flanders et al., 2009)。Peterson & Flanders (2005) は、RTPによる子どもの同一視が発達すること、感情制御の内在化に向かう初期の一形態である「相互コンプライアンス (Committed Compliance) (Kochanska, Tjebkes & Forman, 1998)」がRTPにおいても生じると論じている。「相互コンプライアンス」は、「熱中し、かつ自己の感覚が持続し、親の継続的なコントロールには影響されない (Forman & Kochanska, 2001, p.199)」という特徴を持つ。RTPを通して父子の相互コンプライアンスが基になって生じる父子の協調 (Peterson & Flanders, 2005) が、攻撃性の統制の内在化に向けての展開点となる。

以上、これまでの理論展開は、RTPにおける「競争」「父親の優位性」と、父親から発せられる「統制」と「愛情」の要件、そして内在化の前駆となる父子の「協調」と「相互コンプライアンス」, 「同一視」によって説明がなされているが、これらのどのような変数間関係によって幼児の攻撃性の制御方略が内在化されていくのかは、十分に明らかになっていない。もともとこの分野には、観察記録が少なく (Kochanska, Akson, Prisco & Adams, 2008), 実証的展開に弱い。観察法を整備し、実証に向けてのRTPによる幼児の自己制御発達理論の仮説構成の補完を図る。

### 3. 介入プレイ観察法による事例研究

プレイセラピィの構造を基礎とし、被験者の遊びに参加・介入・観察を統制的に行う。時間・空間・遊び用具を統制し、被験者の自発的自由遊びのプレイ相手となる研究者は、介入を統制し参加観察を行う。

#### 3. 1 事例

トオル: 2歳9ヶ月の男児, 年相応の体型で、嬉しいことや楽しいことがあると飛び上がって喜ぶような躍動感のある体つき。好奇心が強く表情が豊かである。

#### 3. 2 構造

部屋は幼児が十分に走り回ることができる広さで、カーペットを敷き、ボールやおもちゃの銃や日本刀、ミニカー等をおき、体操用のマットの上には、幼児より一回り大きいクッションを6個置いた。時間構造は、1週間に1回、45分とし、17回の展開過程を観察記録した。

#### 3. 3 統制介入

RTPを促進する刺激を与え続け、遊びの限界設定を行い、攻撃性が発露された一定の危険な行為 (物を破損させようとする・人に暴力を与えようとする) に対しては、評価を与えるのではなく、幼児の行動を制止し、攻撃性が安全に表出されるような行為・態度を実際にやってみせるという行動制限を行う。

[RTPを促進する刺激の例]: トオルと筆者がマットの上に倒れ込んだ後、筆者が〈ほらほら、プロレスだー〉と言いながら、トオルの身体を筆者の身体の上に持ち上げたり、トオルの身体を筆者の身体の上に落として抱きかかえたりする。

[遊びの限界設定の例]: トオルが竹刀を持ったときには、筆者の身体を打つのではなく、筆者が持った竹刀を思い切り打つように示す。

#### 3. 4 事例概要

ベースライン観察査定 (セッション#1):

心身の正常発達。二者遊びを楽しむことができ、身体運動への馴染み、攻撃性の表出、表現も年齢相応にある。

事例概要:

トオルは当初、ミニカーや電車を動かすという遊びを行ったが (#1), 日本刀と銃のおもちゃを見つけて以来 (#2), RTPに取り組み始める。#7で初めてトオルは筆者に対して自分の身体をぶつけて、押し合いをすることができた後、#10には筆者の〈はっけよーい、のこった〉で身体をぶつけあうことができ、レスリングを楽しむことができるようになる。おもちゃの日本刀で物を切る遊びは続けていたが、#13でおいかっこをした後、初めて斬り合いの遊びができる。それ以降は対面

でのチャンバラとすもうが合わさったような闘い遊びができるようになる。#16で「火がでた！」と言って消火活動をする遊びや「おばけがでた！」と言ってオモチャの日本刀と銃で「おばけ」をやっつけた末に「たから（宝）」を見つけるというファンタジー遊びが展開する。次回で遊びが終わりになることが伝えられる。#17で1回目からこれまでの遊びを総ざらいし、17回の遊びを終わる。

#### 4. 攻撃性自己制御の発達理論仮説の構成

攻撃性の制御を内在化していく前駆となる父子の協調は、幼児の運動スキーマ形成から始まる。「RTPでは、遊びの雰囲気相互作用の中で、他者の価値を配慮しながら自らの身体を用いる運動スキーマが発達する。幼児はこの運動スキーマによって、不安・欲求不満と勝利へのスリルをコントロールすることを学ぶ (Peterson & Flanders, 2005, p.142)。」

運動スキーマが形成されると、幼児はそれを用いて他者と協調をするようになる (Peterson & Flanders, 2005)。幼児は自分が好きなRTPを続けるために、父親の喜びや楽しさを持続させるよう自分の行動を調節することを学ぶ (Flanders et al., 2009)。このプロセスを経て、幼児に「協調」の行動と概念が生起する。協調とは、攻撃性を生産的な意味で非効果にするような形で他者と同じ空間を占有することである (Peterson & Flanders, 2005)。では、この運動スキーマはどのような機構によって形成されるのだろうか。

(ヴィネット1) #3で、トオルと筆者がおいかげっこをした後に、トオルはオモチャ箱の中の日本刀と銃のオモチャに気付く。トオルは二つの日本刀と二つの銃を出し、「せんせーのこれー」と日本刀と銃を一つずつ筆者に渡してくる。トオルは刀と銃を手を持つ。そしてトオルは部屋の窓のところまで走っていき、鞘から刀を抜かずに窓枠を強く叩いてしまう。そこで筆者が〈トオルくん〉と言い、窓の近くにクッションを立てかけ、筆者

が持っていた刀を鞘から抜いて、クッションに斬りつけ、また鞘に収めるという動作を見せながら〈刀をこうやって抜いて、それでこうやってしまう。刀は抜いたらちゃんと鞘に入れると格好いいよ。〉と言うと、トオルは銃を置き、筆者の動きを真似して、刀を鞘から抜いてクッションを斬りつけてまた刀を鞘に収めるという動作をする。トオルと筆者は、窓の外を見ながら「バンバン」と言って同じクッションを日本刀で切る動作を繰り返す。それをしばらく続けた後、筆者が〈刀で切ったらどうするんだっけ〉と言うとトオルは自分で刀を鞘に収めた。その後、トオルは部屋の中を走りまわり始め、怪獣のビニールフィギュアを見つけて、それを刀で「バンバン」と強く叩いた後、トオルは筆者の顔を一瞬見て、刀を鞘に収める。筆者の〈かっこいい!〉にトオルは「かっこいい」と言い誇らしそうに笑った。#4では、トオルは最初に「にんじゃやりたい」と言い日本刀と銃のオモチャを二つずつ出し、自分が日本刀と銃を一つずつ持って、筆者にも一つずつ渡してくる。トオルは筆者に銃を彼の腰にはめさせて、クッションの上に怪獣のフィギュアを乗せて「かいじゅうにたってほしい」と言い、筆者に怪獣をクッションの上に立てるように促した後、トオルは「バーン」と言いながら鞘から刀を抜かないまま怪獣のフィギュアを叩く。筆者が〈刀はこうやって抜くとかっこいいよ〉と筆者が持っている刀を抜いてみせると、トオルは日本刀を持ち、鞘から刀を抜いて怪獣を叩き、その後刀を鞘に収めるという動作を数回繰り返した。#5では、トオルが「にんじゃごっこ」と言い、筆者に銃のオモチャを腰にはめさせて、刀を持ち、怪獣をクッションの上に載せて刀を抜き、「バーン」と言いながら刀で怪獣を叩く。その後、トオルは誇らしそうに刀を抜いては怪獣を切り、鞘に収めるという動作を一人で3回繰り返した。

このヴィネットの中で、#3でトオルは日本刀のオモチャを、刀を抜かずに振り回し、窓枠を強く叩いてしまっていたが、筆者から「刀を抜いて、クッションを斬りつけて、鞘に収める」とい

う制限が与えられ、それをトオルは模倣することによって彼の攻撃性が表れた行動を制限することを行っている。また、筆者からはそうすることが「かっこいい」という価値を呈示されている。その後すぐにトオルと筆者は共に刀を抜き、クッションに斬りつけ、鞘に収めるという協調的行動を続けている。#4では、トオルが鞘から刀を抜かないまま怪獣を叩くことをした際に、筆者が持っていた日本刀の刀を抜いてみせると、トオルは日本刀の刀を抜き、怪獣に切りつけた鞘に収めるという動作を数回繰り返すようになっている。#5では筆者に言われなくても、誇らしそうに「刀を抜いて切ったら、また鞘に収める」という動作を繰り返している。

この運動スキーマが形成される上で、主に用いられているのはトオルの筆者への「模倣 (Piaget, 1932; Peterson & Flanders, 2005)」である。#3では、トオルは筆者が見せる「刀を抜いて切ったら、また鞘に収める」という動作をトオルは模倣している。この観察が示唆するのは、幼児が運動スキーマを形成する際には、親が示す制限を伴う一連の運動・動きに対する幼児の模倣が生じるということである。模倣は対象関係の展開過程において生じ (Spitz, 1957)、模倣と知覚は、「対象との最初の関係 (Fenichel, 1945)」を表象化する一連のプロセスの諸側面である (Schecter, 1968)。幼児によって知覚された親が示す動作が、幼児の精神内に表象化され、それ故に内在化を可能にし、幼児の模倣による動作は延滞・遅延しても生じる (Piaget, 1932 pp.64-67)。このような内在化された模倣こそ、厳密な意味での同一視の証拠である (Spitz, 1957)。かつそれは一次的同一視から二次的同一視 (Jacobson, 1964) への発達の移行を示す。なぜなら、「そこには幼児によつての、リビディナルな対象の動作についての、幼児の知覚と記憶に基づく、幼児の自我の構造の形成がある (Schecter, 1968, p.67)」からである。RTP内で父親が示した攻撃性を制御する行動は幼児によって模倣され、表象能力を持つ2歳児はそれを内在化し、運動スキーマが形成されると共に、幼児が観察した父親の動きの知覚と記憶に基づく自我構造の形成が進

むと考えられる。これがRTPにおける模倣から内在化という同一視の萌芽と、対象関係の安定化への機構である。

この運動スキーマが形成されると、即座に協調 (Peterson & Flanders, 2005) が生起している。#3で「刀を抜いて、クッションを斬りつけて、鞘に収める」という運動スキーマが模倣によって形成されるとすぐに、トオルと筆者に同じクッションを斬りつけるという協調行動が起きた。

父と子の協調が安定的になると、その協調を基盤として、幼児は自らの身体と親の身体を使って、探索と挑戦をし始める。その時、RTP内における父子関係に、攻撃性の自己制御の発達に基づく新たな展開が起きる。次に、筆者とのRTPの中でトオルが自発的に新しい種類の遊びを始めた切片を描く。

(ヴィネット2) #13では、トオルがオモチャの刀を取り出し、筆者もオモチャの刀を持つ〈たたかい、やるか!〉と筆者が構えるのに対して、それまでの回では斬り合いを避けていたトオルも、筆者の方を向いて構える。筆者が〈いくぞ、ぐさー!〉と言いながらトオルの腹部に刀をあてると、トオルは少し顔を引きつらせながら刀で筆者の身体の足や腹部に切りつける。7回ぐらいトオルと筆者は斬り合ったところでトオルは刀を置いて斬り合いをやめてしまう。そしてトオルはバスのミニカーを持ち、筆者には同じくらいの大きさの電車のミニカーを持たせて、クッションが積み上げられている小山の斜面にバスを走らせ始める「せんせーものぼろ」、筆者は電車のモデルを走らせてトオルと共にクッションの小山の上によじのぼる。頂上に登り、筆者の〈やったー、うれしい、きもちい〉にトオルは「きもちい」と言う。その後トオルと筆者が小山を下りた後、トオルはバスを持ってクッションの小山の中腹に、バスを押し込んで、クッションの中にもぐりこみはじめる。その中でトオルは「こわい」と言う。トオルが頭を差し込んでいるところに筆者も上半身を入れ、〈大丈夫だ! 行ける。一緒に行こう!〉と言うとトオルはクッションの山の中に入っていき、中の

一番深いところまでもぐったトオルは、「カニがいた！」と驚き喜ぶ。筆者は〈すごいなー、カニを見つけたか、すごいぞトオル〉と言う。山の中から出て来たトオルはバスのモデルを元置いてあった場所に置き、そしてまたオモチャの刀を持ち、筆者にも刀を持つように促し、自分も刀を構えて、筆者のところに「バーン」と斬りつけ、斬り合いのチャンバラをまた始める。今度は笑顔をみせ、歓声を上げながら斬り合いを続ける。トオルと筆者は互いに十数回斬り合った。

ヴィネット2では、筆者と向かい合う競争的なRTPであるチャンバラに挑戦するが、当初は不安感が高い。そこで一度トオルは、バスのミニカーを持ち、筆者には電車のミニカーを持たせて、直面的ではなく、トオルと筆者が同じ方向を向いて同じ行動をする同方向的な身体遊びを始め、その中で、共にクッションの小山によじのぼったりもぐりこんだりという同方向的なRTPを行っている。トオルが「カニ」をみつける成功体験を筆者と共有した後、今度はチャンバラを楽しむことができた。

RTPにおける挑戦がさらに進み、優位な男性への競争的な遊びへと展開する時に感じる強い攻撃性や不安感を許容するために、幼児は直面的・競争的な遊びより一つ前の段階である同方向的な遊びの中で協調を行い、探索や挑戦を父親と一緒に成功させることで、父親との結びつきを確認して自らの不安感を許容する。そして次に競争的な遊びを行うときには、その中でも協調をすることができ、自らの攻撃的エネルギーを喜びと楽しさとして体験できるのである。

これまでの理論では、RTPでの父親は適度に堅く(firm)、適度に能動的な(assertive)遊び相手である(Flanders et al., 2009)とされ、父親は子どもが攻撃的な感情の取り扱いを学ぶことを、RTPにおける統制された直面化によって助ける(Paquette, 2004)と論じられてきた。本観察が示しているのは、幼児は競争的な遊びに挑戦する際には強い攻撃性や不安感を体験するが、それまでの父親との同方向的な身体活動で培われた協調を確認するこ

とで、攻撃性と不安感を統制し、競争的かつ直面的な状況でも父親との協調ができるようになり、幼児の自己制御能力はさらに展開するということである。

トオルがクッションの小山の中にもぐりこんだ時には、実際にはクッションの中には存在しないカニを見つけたというファンタジーを浮上させることで、達成感や喜びを表現し、それに対して筆者も〈すごいぞ〉と言うことで怖さを越えて挑戦し成功したトオルへの誇らしさを表現している。身体遊びにおける父親との同方向的な活動と探索や、父親との競争的な遊びにおける挑戦と成功をした幼児に対して、父親は「すごい」や「よくやった」などと言って誇らしさを明白に示す。幼児の成功の体験と父親による賞賛と誇りの表現は、模倣から同一視への展開を促進する。親が連続的に存在し、幼児が親を模倣できる状況にあることや、それに伴い幼児が達成感、効力感、自尊心の向上を連続的に体験したりする等の強化を得ることが、同一視の萌芽となり、模倣から同一視が発達していく(Schechter, 1968)。RTPは、幼児によって模倣された行動と態度が、父親による賞賛と幼児自らの喜びによって強化されることで、模倣から同一視、対象関係の安定化という過程を押し進める豊かな発達装置なのである。

RTPは対象関係の展開まで影響を及ぼし得る。2歳以降の幼児が、父親とRTPをすることで、Edgcumbe & Burgner (1975)が男根自己愛期と呼んだ男女共通の発達段階における発達課題の促進とその確認のプロセスが生じる。この時期には自分の身体を好きになり、それに誇りをもつという課題がある。女兒も父親とのRTPの中で走ったり飛び跳ねたりすることで、運動感覚的な快感を楽しみ、自らの身体に誇りをもつ(Tyson & Tyson, 1990)。幼児が、身体遊びやRTPにおいて、自分の身体を使って活動をし、限界を超えて新たな活動や遊びに成功し、その達成を父親から賞賛されて、誇らしさと効力感を味わうことは、この時期の男女共通の課題であると共に、それを促進する内的対象としての父親表象が凝集する。

特に男児の場合、「幼児の勇敢な行為に対し

て、両親が感じた誇りを目に見える形で示した場合に、男児の男性としての身体、男性性の感覚などに対する最適なナルシズム的備給は、著しく増加する。その時男児は、親が感じた誇りを内在化し、彼の男性性についての自信が強化される (Tyson & Tyson, 1990, p.142)。] RTPを通して幼児が体験する圧倒的に優位な男性としての父親がもつ、父親の男性としての強さや勇敢さについて、男児は理想化と同一視を行う。父と息子のRTPにおいては、自己制御のみならず、男児の性別同一性 (gender identity) の根幹をなす男性性 (Blos, 1968) が育まれると言える。幼児期に父子二者関係におけるRTPを通して発達する父親への同一視は、その後の青年期初期に、青年が依存と独立の葛藤に直面した際に、青年が独立へと進むのを支持する同一視編成 (Besser & Blatt, 2007; 荻本, 2012) に向けての発達早期における前駆体となる。

## 5. 結論

結論として、RTPによる攻撃性の自己制御が発達する要件の変数間関係について理論仮説を呈示する。

攻撃性を制御できない幼児が攻撃性の自己制御ができるようになる際には、幼児が父親と行うRTPが果たす役割が大きい。自らの攻撃性を統制する能力を持っている父親は、RTPの中での幼児の攻撃性の発露を許容することができる。RTP中で幼児が攻撃性を制御しなかった瞬間に、父親は攻撃性を統制する行為と態度を自ら示すことで幼児の行動を統制しようとする。その父親を観察する幼児は、父親を模倣し、父親の行為と態度に対する同一視を行うことで、同一視した領域での運動スキーマを形成し、父親の行為と態度を内在化し、その領域における攻撃性の統制能力を得る。父親を模倣して運動スキーマを形成し、父親と同じ行為をする「協調」を行うことは幼児にとっての喜びとなる。それは圧倒的な優位性を持つ父親を模倣できているからであり、幼児は自らの攻撃性を今や統制して父親と共有した空間の中でそれを表現できるようになったからである。こうし

て、協調による喜びは幼児の自己制御を安定化させる一因となる。さらに幼児の自己制御が安定的になるのは、幼児が父親との協調を基盤として自発的に自らの身体的・感情的・認知的限界を超えようとするRTPに挑戦するからである。幼児はそれまで統制が可能であった攻撃性を越えて、量としても質としても新たな攻撃性の統御に挑もうとし、父親もそれを促す。このとき父親と幼児の間に「相互コンプライアンス」が成立するのである。幼児が新たなRTPに挑戦し、それに成功することで、父親は幼児からの競争に対して直面しながらも、勇敢な幼児への愛情と誇りを示す。挑戦への成功によって幼児の効力感と自尊心が向上すること、それに対して父親から誇りと愛情が表現されることは幼児の父親への同一視を安定化させ、攻撃性の自己制御を促進する内的対象としての父親が凝集していく。こうして、RTPにおいて一定の枠内で遊びの風土が維持されたまま、幼児が攻撃性の発露をする度に、父親による統制と幼児による模倣という相互作用が生じ、幼児が制御することが可能な攻撃性の量と領域が広がられていき、幼児の自己制御能力は発達していく。

今後の展望と課題として、本研究で提出された発達理論仮説について、それぞれの要件の抽出を行い、実証的に検討を行っていく必要がある。特に、先行研究 (Flanders et al., 2009) では、父親と幼児の相互作用における父親の優位性のみが着目され、父親から幼児への誇りと賞賛の表現については検討していない。父子のRTP中に幼児への誇りと賞賛を表現する父親とそうでない父親を抽出し、その幼児の自己制御能力を比較していくことが次なる実証的展開となるだろう。

## 引用文献

- Barth, J. M., & Parke, R. D. (1993). Parent-child relationship influences on children's transition to school. *Merrill-Palmer Quarterly*, 39, 173-195.
- Besser, A., & Blatt, S. J. (2007). Identity consolidation and internalizing and externalizing problem behaviors in early adolescence. *Psychoanalytic Psychology* 24, 126-149.
- Blos, P. (1968). Character formation in adolescence.

- Psychoanalytic Study of the Child*, 23, 245-263.
- Carson, J. L., & Parke, R. D. (1996). Reciprocal negative affect in parent child interactions and children's peer competency. *Child Development*, 67, 2217-2226.
- Edgumbe, R. N., & Burgner, M. (1975). The phallic narcissistic phase: A differentiation between preoedipal and oedipal aspects of phallic development. *Psychoanalytic Study of Child*, 30, 161-180.
- Fenichel, O. (1945). *The psychoanalytic theory of neurosis*. New York, NY: Norton.
- Filed, T. M., & Walden, T. A. (2008). Production and discrimination of facial expression by preschool children. *Child Development*, 53, 1299-1311.
- Flanders, J. L., Leo, V., Paquette, D., Pihl, R. O., & Seguin, J. R. (2009). Rough-and-tumble play and the regulation of aggression: An observational study of father-child play dyads. *Aggressive Behavior*, 35, 285-295.
- Forman, D. R., & Kochanska, G. (2001). Viewing imitation as child responsiveness: A link between teaching and socialization domains of socialization. *Developmental Psychology*, 37, 198-206.
- Jacobson, E. (1964). *The self and the object world*. New York, NY: International Universities Press. 伊藤 洸 (訳) (1981). 自己と対象世界 岩崎学術出版社.
- Kochanska, G., Tjebkes, T. L., & Forman, D. R. (1998). Children's emerging regulation of conduct: Restraint, compliance, and internalization from infancy to the second year. *Child Development*, 69, 1378-1389.
- Kochanska, G., Akson, N., Prisco, R. P., & Adams, E. E. (2008). Mother-child and father-child mutually responsive orientation in the first 2 years and children's outcomes at preschool age: Mechanisms of influence. *Child Development*, 79, 30-44
- Lindsey, A. W., & Mize, J. (2000). Parent-child physical and pretense play: Links to children's social competence. *Merrill-Palmer Quarterly*, 46, 565-591.
- 荻本快 (2012). 同一視編成理論の発達理論における意味. 国際基督教大学学報 1-A 教育研究, 54, 145-153.
- Paquette, D. (2004). Theorizing the father-child relationship: Mechanisms and developmental outcomes. *Human Development*, 47, 193-219.
- Paquette, D., Carbonneau, R., Dubeau, D., Bigras, M., & Tremblay, R. E. (2003). Prevalence of father-child rough-and-tumble play and physical aggression in preschool children. *European Journal of Education*, 18, 171-189.
- Pellegrini, A., & Smith, P. (1998). The development of play during childhood: Forms and possible function. *Child Psychology & Psychiatry Review*, 3, 51-57.
- Peterson, J. B., & Flanders, J. L. (2005). Play and the regulation of aggression. In Tremblay, R. E., Hartup, W. W., & Archer I. (Eds). *Developmental origins of aggression* (pp.133-157). New York, NY: Guilford Press.
- Piaget, J. (1932). *The moral judgment of the child*. New York, NY: Free Press.
- Seguin, J. R., & Zelazo, P. D. (2005). Executive function in early physical aggression. In Tremblay, R. E., Hartup, W. W., & Archer I. (Eds). *Developmental origins of aggression* (pp.307-329). New York, NY: Guilford Press.
- Schechter, D. E. (1968). Identification and individuation. *Journal of the American Psychoanalytic Association*, 16, 48-80.
- Spitz, R. A. (1957). *No and yes: On the genesis of human communication*. New York, NY: International Universities Press.
- Tyson, P., & Tyson, R. L. (1990). The developmental process. *Psychoanalytic theories of development : An integration*. New Haven, CT: Yale University Press. 皆川邦直・山科満 (監訳) (2008). 精神分析的発達理論の統合②. 岩崎学術出版社.
- Zelazo, P. D., Carter, A., Reznick, J. S., & Frye, D. (1997). Early development of executive function: A problem-solving framework. *Review of General Psychology*, 1, 198-226.

## 付記

観察記録の発表を快諾して下さったトオル君と保護者の方に心より御礼申し上げます。研究にあたりご協力を頂いた国際基督教大学高等臨床心理学研究所と、本稿執筆の初期から貴重なご助言を賜った国際基督教大学名誉教授小谷英文先生に感謝申し上げます。

## 注

- 1 Rough-and-Tumble Play (RTP) の定訳は未だにないため、本稿では「乱闘遊び」という訳を掲載し、本文中は「RTP」の略号を用いることとした。